

第2回千代田区敬老事業検討会 議事要旨

<日時>

平成30年1月10日（水） 18:28 開会 20:10 閉会

<会場>

千代田区役所4階 401会議室

<出席委員>※敬称略

熊田博喜、朝日ちさと（以上、学識経験者）

小野田文紀、保志場宏、岩澤勝子、安原勝子、星野絹子、廣木朋子、山崎正樹、西崎里美、佐伯邦子、
中尾純子（以上、区民代表）

<出席区職員>

歌川保健福祉部長、櫻片高齢介護課長、藤巻高齢介護係長、岸谷主事、小澤主事

<出席関係者>※コンサル業務受託事業者

小林健祐、日高彬人

<配布資料>

- ・次第
- ・座席表
- ・千代田区敬老事業検討会委員名簿
- ・千代田区敬老事業検討会執行機関（事務局）名簿
- ・第1回千代田区敬老事業検討会での質問事項に対する回答（資料1-1）
- ・平成29年度敬老会当日（9月15日）時点の人数データ（資料1-2）
- ・平成28年度他区敬老会関係事業の状況（資料1-3）
- ・平成29年度敬老事業予算内訳（資料1-4）
- ・敬老事業に関するアンケート調査結果報告書（資料2-1）
- ・敬老事業に関するアンケート意見（資料2-2）
- ・（参考資料）第1回敬老事業検討会資料

<要点議事録>

1. 開会挨拶

(1) 高齢介護課長より挨拶

高齢介護課長より事務局から開催挨拶。

会議の公開を行うこと、議事録を作成することを確認。

(2) 熊田会長より挨拶

本日の進行について説明。

前回委員より出た質問に対する回答と、区で実施した調査の結果を説明する点を確認。

(3) 高齢介護課長より会議開催成立の確認

委員の出席が規定数を満たしているため、会議の成立を確認。

2. 第1回検討会での質問事項に関する回答

櫻片高齢介護課長より、第1回検討会で出た委員からの質問3点について回答。

(1) 佐伯委員からの質問について

櫻片課長：資料 1-2 をご覧ください。敬老会の対象者のうち寝たきりや入院中などで参加できない方はどのくらいいるのかという質問に対する回答をお示ししています。

寝たきりや入院している方の具体的な人数を把握することはできませんでした。そのため、参考として、平成 29 年度の敬老会当日の要介護度 3 以上の方の人数をお示ししています。要介護度 3 以上の人数を挙げている理由としては、人によって状態は異なりますが、要介護度 3 の方の心身の状態の例として「立ち上がりなどが自分でできない。歩行が自分でできないことがある。」が挙げられ、敬老会に一人で来ることが難しい可能性が高いと思われるためです。75 歳以上の高齢者のうち、要介護（要支援）認定を受けている方は 35%、要介護 3 以上の認定者は 12.8%です。

(2) 西崎委員からの質問について

櫻片課長：資料 1-3 をご覧ください。敬老会の参加率は他の区と比較してどの程度かお示ししています。

敬老会を実施している都内 8 区に対し電話等で調査を行ったところ、千代田区の参加率 26.3% は、上から 4 番目でした。

中央区が最も参加率が高く、これは会場である歌舞伎座のキャパシティが大きく、実施日も複

数日程を用意しているためだと思います。反対に最も参加率が低いのは渋谷区で、2.5%の参加に留まっています。これは、千代田区では対象者に個別で通知を行っていますが、渋谷区では広報誌やホームページでの周知のみであり告知を積極的に行っていないことが理由として考えられます。また、会場が駅から遠く比較的アクセスがよくないことなども理由であると思われます。

他の区と比較し、千代田区の敬老会で特徴的なこととしては、バスを借り上げて参加者の送迎を行っている点が挙げられます。当日は職員 50 名以上が事務従事しており、他の区と比較しても手厚い対応を行っています。

(3) 小野田委員からの質問について

櫻片課長：資料 1-4 をご覧ください。敬老会の予算内訳をお示ししており、予算内訳 14,338 千円に対し、タレントなどに支払う委託費が約 4 割、バス代が約 2 割、会場費が約 2 割を占めています。敬老祝金・祝品、敬老入浴券についても参考として内訳を記載しています。

熊田会長：回答内容について、委員の皆様からご意見などございますか。

星野委員：敬老会の送迎バスは元気な人は問題なく乗車できますが、車椅子では乗車できず、自分自身、タクシーを手配しています。車椅子でも乗車できるバスなどを利用できるようになれば便利だと感じています。

櫻片課長：もともと本検討会を立ち上げたのも、誰もがより使いやすい事業にすることが目的であったため、そういった部分は課題であると感じております。すぐに対応することは難しいですが、今後検討していきたいと思えます。

熊田会長：今後の高齢化社会においては、車椅子対応を含めた配慮は重要であると思うので、今後検討が必要であるかと思えます。一点質問なのですが、要介護度 3 以上の方が区内にも多くいらっしゃるということで、要介護度が高くなればなるほど、当然敬老会への参加は難しくなると思われます。そういった方に対する配慮や代替サービスの提供は何かあるのでしょうか。

櫻片課長：他の区と比較して、告知の仕方など含めなるべく多くの方に参加していただけるよう、努力しています。

熊田会長：承知しました。他の委員の皆様からは意見等無いようなので、続いてアンケート調査の結果について、事務局から説明をお願いいたします。

3. 区で実施した敬老事業に関するアンケートの結果報告

纓片高齢介護課長より、インターネットを活用したアンケート調査と、郵送で実施したアンケート調査について結果を報告。

(1) インターネット調査の概要について

纓片課長：資料 2-1 をご覧ください。前回の検討会を受けて区民の皆様の敬老事業に対する意見を聴取するためにインターネットと郵送の 2 つの方法を用い、敬老事業に関するアンケート調査を実施しました。まず、インターネット調査については、6 月に実施し、回答数が 125 で若い方の回答数が比較的多い結果となっています。

事業認知率については、敬老会が 21.6%、敬老祝金・祝品が 26.4%、敬老入浴券が 25.6%で 3 事業の中では敬老祝金・祝品がもっとも高い結果でした。3 事業のうち 1 事業でも知っているという方は 33.6%で、どの事業も知らないという方は 66.4%でした。

参加・利用意向については若い方の回答が多いこともあり、3 事業とも「参加・利用していない、もしくは自分が対象であっても参加・利用したいと思わない」という回答が「参加・利用している、もしくは自分が対象であれば参加・利用したい」という回答を上回っています。3 事業の「参加・利用したい」という回答の割合を比較すると敬老祝金・祝品が最も高く 47.2%で、反対に敬老会は 20.8%と最も低い結果となっています。

(2) 郵送調査の概要について

纓片課長：郵送調査については、合計 1,176 通を発送し、回答数は 232 でした。敬老事業の利用対象者となる 60 代以上の年齢層が回答者のうち 30%以上を占めており、インターネット調査よりも認知率などが高い傾向となっています。

事業認知率については、敬老会が 37.5%、敬老祝金・祝品が 40.5%、敬老入浴券が 39.2%でインターネット調査同様、3 事業の中では敬老祝金・祝品が最も高い結果となっています。3 事業のうち 1 事業でも知っているという方は 51.3%で、どの事業も知らないという方は 48.7%でした。

参加・利用意向については、敬老会と敬老入浴券についてはインターネット調査と同様、「参加・利用していない、もしくは自分が対象であっても参加・利用したいと思わない」という回答が「参加・利用している、もしくは自分が対象であれば参加・利用したい」という回答を上回っています。一方で敬老祝金・祝品については「受け取っている、もしくは自分が対象であれば受け取りたい」という回答の割合は 61.6%と 3 事業の中で最も高く、また、「受け取っていない、もしくは自分が対象であったとしても受け取りたいと思わない」という回答を上回っています。参加意向が最も低いのは敬老会で 33.6%でした。

(3) アンケートで出た個別意見（自由意見）について

纓片課長：資料 2-2 をご覧ください。自由記述欄の主な意見を一覧でまとめています。代表的なものを一部抜粋して紹介します。

【敬老会についての賛成意見、反対意見】

- ・ 50 年後も続けてほしい。
- ・ 敬老会自体が外出の機会になるので、続けてほしい。
- ・ 高齢者を敬うという精神において実施される敬老事業自体に意義があるので、質を落とさずに続けてほしい。
- ・ 敬老会のお金は、別の事業に使ってほしい。
- ・ 貸切バスを使用しているが、その経費がもったいないと感じる。
- ・ 参加できない人や参加したくない人もいることから不公平感がある。

【敬老祝品・敬老祝金についての賛成意見、反対意見】

- ・ 受け取る対象者をもっと絞るべき。
- ・ 高齢者だけではなく、若年層にもお金を使うべき。
- ・ 敬老祝品はいらないと感じる。
- ・ 金品を渡すことは、時代にそぐわないと感じる。

【敬老入浴券についての賛成意見、反対意見】

- ・ 入浴券は時代外れではないか。
- ・ 高齢者だけではなく、子育て世代含む若年層にもっとお金を使ってほしい。

【事業に対する個別要望】

- ・ 敬老会は、複数の劇場や公演から、好みに合わせて選択ができるといいと感じる。
- ・ 敬老祝金については、お金ではなく、地域で利用できる金券等の形にしてほしい。
- ・ 入浴券については、ジムの利用券など、健康増進の観点で見直してほしい。
- ・ カタログギフトのように、選択ができる形で実施してほしい。

纓片課長：全体を通し、幅広い意見が出ており、個別のニーズ等も多く出ています。

熊田会長：アンケート調査を踏まえて委員の皆様からご意見などございますか。

佐伯委員：調査結果を見たところ、回答者に占める高齢者の割合が少なすぎるのではないのでしょうか。若い人の意見も大事ですが、近年は高齢者も働いているケースもあり、高齢者も税金負担をしているのだから、若い人中心のデータは納得ができないし、若い人が敬老事業について答えたら、参加意向などが低く出るのは当たり前であると思います。郵送調査についても、インターネット調査よりは 60 代以上の回答割合が高いとはいえ 3 割程度と少なく、事業対象となる年齢層に意見が足りないのではないのでしょうか。初めに結論ありきの調査のように感じますが、区としてどのような考えがあるのかを教えていただきたいです。

熊田会長：今回の調査の意図について、再度区から説明をお願いします。

纓片課長：今回の調査については、敬老事業を縮小したい、廃止したいなどの意図で行ったものではないことは、改めてご理解いただければと存じます。対象者全体が、より幅広く利用できる内容に改善できないだろうかという考え方で、若年層も含め、広く区民の意見を聞くために行ったもので、高齢者全体の満足度を上げていきたいという思いから実施したものであります。若い方の認知度が低い点については、一定程度仕方がないと考えており、この調査結果をもって事業を見直そうというわけではなく、あくまで今後の検討や改善のために幅広い世代の意見を聞いたもので、今後の議論に資するものになればと考えております。

熊田会長：若い世代にとっては、関係の薄い高齢者事業には興味がないと思うのは当然であると思うので、現在のサービス対象者である高齢者のニーズを的確に捉えていくことが必要であると考えます。他に意見などございますか。

中尾委員：調査の対象者はどのように選択したのですか。

纓片課長：インターネット調査については、調査会社に登録しているモニターの中から、千代田区の居住者を無作為抽出し実施しています。郵送調査については、郵便局の配達地域指定郵便を利用し、麴町と神田あわせて1,000通程度になるような地域に送付しております。

中尾委員：調査の対象についてはわかりました。

私自身、現役時代は地域に目を向ける機会がほとんどなかったのですが、65歳になって入浴券を自分が使用してみる立場になると地域のコミュニティ拠点として、銭湯が重要な場所であると感じています。この事業が高齢者のためにあるのであれば、高齢者にとってより使いやすい制度にするべきであるし、事業の内容としては地域と交わる、人と交流するなど心と体の健康に寄与するものが良いと思います。自分としては入浴券の配布があることで家に閉じこもらず外に出るし、地域に身を置くことができているのでありがたいと感じています。

熊田会長：では、この先はそれぞれの事業に対する意見を各委員から順番にいただきたいと思います。中尾委員は敬老会、敬老祝金・祝品についてはどう考えていらっしゃいますか。

中尾委員：現在それに参加して楽しんでいる人がいるのであれば、不公平感を感じている人が一部にいるとしても続けるべきだと思っています。

熊田会長：ありがとうございます。では、星野委員から順番にご意見をお願いいたします。

星野委員：敬老会、敬老祝金・祝品は良い制度だと思っています。ただし、敬老入浴券については、公衆浴場を利用する方が少なくなっていると感じるので見直しも必要かと思っています。

岩澤委員：現在の事業を望む人がいる限り続けるべきだと思っています。ただし、やり方については検討が必要で、ただ入浴券を渡すだけではなく、交流が起きる仕掛けなどがあればいいのではないかと考えています。敬老会については、参加しない方の理由としては、出し物によって参加しなかったり、参加しにくい方もいたりすると聞きます。どうしてもそのような声は大きく表に出てこないのも、そのような潜在的な意見も拾ってほしいと感じるし、広く意見を募っていただきたいです。

熊田会長：単に入浴券を渡すだけではなく、イベントと組み合わせるなどそれを活用した交流の機会を作るべきだというご意見であるということでしょうか。承知しました。

小野田委員：現役世代は、なかなか敬老事業には気が回らないと思います。しかし、実際に敬老会の様子

をみると、とても熱気があり楽しみにしている方も多いです。入浴券なども含め、続けるべきだと思っています。アンケート調査については、若年層ではまだ老後のことまで考えないだろうし、意見は必要ないのではないのでしょうか。

保志場委員：連合長寿会は毎月役員会があり、毎年 5 月ごろから次年度の敬老会の出演者を検討しています。区ではなく区民主導で決定しており、昨年も大変評判が良かったです。また星野委員もおっしゃったように、車椅子の方が来やすくなるような配慮は必要だと思います。敬老祝金については、古希や米寿など、区切りの時だけでいいのではないのでしょうか。町会から配布することで安否確認もできるし、お金をもらうことは誰でもうれしいと思います。入浴券については、銭湯は町の社交場であり、地域の人間関係構築のために必要だし、歴史的にも文化的にも重要なものなので、無くすべきではないと思います。

安原委員：敬老入浴券について、高齢者は自宅において一人で入浴するよりも、銭湯に行ったほうが楽しいし、安心できるので良い制度だと思います。季節感を楽しむこともできるし、地域の子供とのふれあいの機会になっています。敬老祝品については、前回の検討会で銀杯はいらないという意見があると言ったのですが、私の母は今年度いただいて非常に喜んでいたので、継続してほしいと今は思っています。また敬老会については、今年評判が良かったし、今の形で続けてほしいと考えています。

廣木委員：敬老会について、一人暮らしや高齢者のみ世帯が多いという千代田区の特徴から、移動手段がないと参加しにくいという状況のため、現在の貸切バスの借上げは必要であると感じています。移動手段があるからこそ、現在の参加率につながっていると思います。ちなみに、長寿会で芸能を鑑賞する会を行っているのですが、こちらもバスを借りているので、このような他の取り組みと組み合わせることを検討してみてもいいのではないのでしょうか。また、一人で行くのは心配という方もいるので、家族もしくは民生委員など地域の方と同伴可能にすることなども必要かと感じています。その他に、敬老会に参加できない福祉施設入所者に対し何か交流の場があってもよいと思います。敬老祝金は配付を通じ、町会との接点を作る機会になるので、制度自体は必要だと思いますが、対象年齢の区分が細かくいつもらえるかがわかりにくいので見直してよいのではないのでしょうか。

敬老入浴券については、交流の場としては有効ですが、銭湯に行くのが嫌な方もいると思います。現在の高齢者は、昔よりも「自分がやりたいことを自分で選べる」ということを求めていると思うので、選択できることが大事だと思います。例えばスポーツジムの利用や買い物券なども選択肢にあり、自分の好きな物を選べるということが大切なのではないのでしょうか。社会福祉協議会歳末たすけあいの事業では、クオカードを配付し、コンビニなどの日々の買い物でも使えるのが便利という声があります。今の時代にあったメニューもあるといいのではないのでしょうか。

山崎委員：シルバー人材センターは 60 歳以上が自由に働ける場であり生活費としての賃金ではなく、労働に対する対価としての報奨金制度をとっています。自分の経験を社会に還元する為や、社会との繋がりを求めたりする為に登録している高齢者が多いです。自分自身は 75 歳以下なので敬老事業に対する関心は薄いのですが、周囲の 75 歳以上の対象者は、概ね楽しみにしているという印象です。特に敬老会については、登録者にも参加者が多く、大変評判もいいので残し

てほしいと思っています。現在の敬老事業が、時代の変遷に伴ってニーズに対応できていないということですが、具体的にどのような場面で対応できないのかを教えてもらえれば、それについて議論できるのではないのでしょうか。

西崎委員：今回の調査について、幅広い世代の意見を聞くという点で、意義があるものだったと思います。今回浮き上がったその問題を、今後どう解決していくかがテーマではないのでしょうか。インターネットを活用することは、回答率を上げるという意味でも必要だったと思うので、挙がってきた個別意見を大切にしてほしいです。また郵送調査については、回答を書いてポストに出しに行くことが高齢者には負担となり、なかなか返信がし辛いと思うので、高齢者の回答率が上がらないのはある程度仕方ないと思います。このような調査では、元気ではないお年寄りの声が反映されにくいと思うので、その点を埋めてほしいです。

自分自身、マンションに住んでいると高齢者と子育て世代との交流が少ないと感じるし、やはり高齢者は交流を欲しているのではないかと思います。そう考えたときに、一方的に金杯銀杯を渡されるだけでは交流にはつながらないし、もらってどうなるのだろうと個人的には思います。そのため、金杯銀杯ではなく、例えばフォトブックをつくるなど写真等を活用して、高齢者の思い出を話してもらうなど、「高齢者と他の世代の交流」をテーマとした、新しいサービスがあったらいいのではないかと思います。

熊田会長：では、朝日委員から委員の皆様のご意見を踏まえたうえでお願いいたします。

朝日委員：アンケート結果を見ていて興味深いのは、反対意見であっても敬老事業の必要性は誰しもが感じていて、敬老の精神自体は全く否定していない点であると思います。敬老事業を行うことが問題になっているのではなく、敬老の精神を表すための、行政としてのお金の使い方が問題になっているということを認識したうえで、論点を整理して考えていくべきであると思います。支払っている税金に対する行政サービスとして、どのようなサービスを得られるかという観点から一般的であると思うのですが、その観点から考えたとき、世代内、世代間のどちらにおいても、不公平感は発生してしまうし、完全になくすことは難しいと思います。世代内と世代間で、限られた財政の中で、どのような資源配分をしていくか、費用対効果を考えながら、全体の満足度を上げていくかという点を議論すべきであると思います。

また敬老事業の価値は提供する商品そのものではなく、それによって誘発される効果にあると思います。たとえば入浴券それ自体ではなく、入浴券をきっかけとした外出機会の創出や浴場での地域交流など、誘発される機能こそが行政で実施する価値であると思います。そのため、サービスの消費だけを目的とするのではなく、世代内、世代間での交流というテーマのもと、高齢者も他の世代も敬老事業がきっかけとなって、自分たちの地域課題の解決に結びつけるような内容に改善していくことが大切であると思います。今後、地域で活動している町会や長寿会などに共通する課題を洗い出し共有していくことで、より効果的な解決が図れるのではないのでしょうか。

熊田会長：では最後に私のほうで本検討会を通して感じたことをまとめると、敬老事業というものを、誰が、誰のために決めるのかという点が最も重要であると思います。サービスを享受している世代と享受していない世代で認識に開きがあるのは当たり前であり、仮に千代田区の財源が圧迫されているなどの状況で、敬老事業の見直しが必要ということであれば全世代での議論が

必要ですが、現状そうではないので、敬老の対象となる側がどのように祝わりたいのかを自身で決めるべきであると思います。この検討会では委員の皆様から実際に敬老事業を利用しての方のご意見などを踏まえたうえで、現在の敬老事業を継続すべきだというご意見をいただいているので、継続するという結論であると思います。

ただし一方で、若い世代からの批判が多いのも事実であり、その方たちが将来的に高齢者になった時に現在の事業をやめてほしいとの意見であれば、それを吸い上げる仕組みが必要であると思います。そのため、現在の事業を永続的に続けるのではなく、その時に事業対象となる世代が内容を決定すべきであり、意向を聞ける体制作り、尊重する精神が大切です。

また、朝日委員がおっしゃたように敬老入浴券は単なる入浴のサービスではなく、交流の機会となっているなど、サービスの結果誘発される効果にフォーカスを当て、活かしていくことが重要であると感じます。その実現のためには、地域の関係団体との連携を進めていくことも必要であると思います。

敬老会については、「全ての対象者にとっての利用しやすさ」という観点が更に必要であるし、敬老祝金・祝品については、配付対象の年齢がわかりにくいなどの意見があるので、今後の課題であると思います。

いずれにしても、2回の検討会を通して、敬老事業については現行事業を継続というご意見だったと思いますが問題ないでしょうか。事務局から何かございますでしょうか。

歌川部長：先ほど佐伯委員からこの検討会そのものが敬老事業の見直しのためのものであるように感じられるとの意見がありましたが、前回の検討会でもお伝えした通り、敬老事業を廃止するための検討会ではないことは改めてご理解いただきたいと思います。

そのうえで、日本の平均寿命や高齢者人口が戦後間もないころと比べ圧倒的に変化しており、政府も社会保障のあり方を見直し全世代型にする必要があるとしています。また、敬老の精神を否定する人はいない一方で、この制度が形作られた昭和30年代での敬老精神と、現在の敬老精神の意義は変化してきていることから改めて敬老事業を検討すべきと考え今回の検討会を立ち上げたものです。皆様からご意見をうかがい、対象者全員が事業を使っているわけではないとはいえ、意義を持っていると感じている方が少なくないことがわかりました。会長からのご指摘通り敬老事業自体を継続していくことには全く同意します。一方で、行政として、事業のやり方については工夫の余地があると考えています。金品のばら撒きは、時代に即さないといったような意見も踏まえながら工夫することで、会長と職務代理のご発言にあったように、ただサービスを提供するのではなく、サービスをきっかけとした意義が生まれると思います。

千代田区も高齢社会を迎えており、元気な時は自分の思い通りに意義のある人生を送っていただき、もし助けが必要になった時は、地域での助け合いや交流がある、支え合いのできる地域包括ケアの実現を目指しています。その中で敬老事業が孤独感の解消や外出のきっかけになるなど意義のあるものにするために一つ一つの事業としてではなくトータルで考えていく必要があると考えています。委員の皆様からは敬老事業に対する様々な意見やヒントをいただきました。今回の2回の検討会は、非常に意義深いものだったと思います。委員の皆様には深く感謝を申し上げます。

熊田会長：以上で本検討会を終了します。委員の皆様、ありがとうございました。
(閉会)

以上